

エドナ・セイント・ヴィンセント・ミレイの 演劇作品

河野賢司

I はじめに

これまでアイルランド演劇を中心に勉強してきて、アメリカ演劇はいわば素人同然の筆者がミレイの演劇について調べてみようという気紛れを起こしたのは、彼女を評して「アイルランド人の血（それにアイルランド人の機知や色合い、^{ハイ・ドラマ}高級演劇と強い酒を好む傾向）を持つメイン州出身の^{ヤンキー}北部人」¹⁾という一節に思わず目を奪われたからであった。そこでミレイ演劇にアイルランド人性の痕跡を読みとる期待を抱きつつ彼女の芝居を読み進めたのだが、残念ながらアイルランドを主題に据えたものはおろか、どんな形にせよアイルランドに言及する箇所すら結局のところ、見いだせずじまいだった。[もっとも、ミレイの友人で、シング顔負けのとてつもないアイルランド訛の英語を駆使したバーズ (Djuna Barnes, 1892-1982) の劇に巡り合えたりする余得には預かったけれど。] とはいえ、〈アイルランド人の機知〉らしき閃きはミレイの文章の端々に感じる事ができたし、詩人としての評価の方が圧倒的に高く、芝居は余り読まれていないらしいこの女性詩人の、劇作家としての一面を系統的に辿ることができたのは筆者にとっては収穫だった。本稿はおそらくミレイの全戯曲7作品に関する、初めての概説的紹介と論評になることと思う。

II 著者略歴

ミレイ (Edna St. Vincent Millay, 1892-1950) は1892年2月22日メイン州ロックランド (Rockland, Maine) に、学校長の父 (Henry Tolman Millay) と看護婦の母 (Cora Buzzelle) の間に3人姉妹の長女として生まれた。8歳ごろに両親は父親のポーカー賭博が原因で離婚し、彼女は母親に引き取られ、自立心の涵養や音楽、読書の愛好を母親から学んだ。バーナード大学、続いてヴァッサー大学²⁾ (Barnard and Vassar Colleges) を1917年に卒業。すでに1912年に投稿詩集で4位入選を果たしていた標題作を含む処女詩集『ルネサンス』 (*Renascence and Other Poems*, 1917) で一躍注目を浴び、1920年代には反逆と自由主義の精神を唱導して名声を得る。ユーモア

作家パーカー (Dorothy Parker, 1893-1967) によれば、誰にでも詩が簡単に書けると誤解させたことは彼女の弊害であるけれど、当時の女性たちはミレイを真似て堂々として颯爽たる振る舞いをし、事実か否かに関わらず、自分は処女ではないと公言して憚らなかつたという³⁾。ミレイは女優としてもプロヴィンスタウン劇場 (Provincetown Playhouse) や演劇組合 (Theatre Guild) に関与し、蠱惑的魅力で文人仲間の寵児となった⁴⁾が、1923年7月フェミニストを標榜するビジネスマンのボワスヴァン (Eugen Jan Boissevain) と結婚。ヨーロッパにしばらくいたあと、ニュー・ヨークのアウステルリッツにあるスティーブルトツプ (Steepletop) 農場に定住し、詩集を発表、『豎琴の織り手』 (*The Harp Weaver and Other Poems*, 1923) でピューリッツァー賞 (Pulitzer Prize) を女性詩人として初受賞している。1927年には、証拠不十分なまま殺人罪で処刑されたイタリアの無政府主義者サッコ (Nicola Sacco, 1891-1927) とヴァンゼッティ (Bartolomeo Vanzetti, 1888-1927) を支持したかどで逮捕され、ボストンの刑務所に入る二人を称える5編の詩を作っている。またこの年、テイラー (Deems Taylor) のオペラのlibrettoである『王の腹心』 (*The King's Henchman*, 1927) がメトロポリタン・オペラ・ハウス (Metropolitan Opera House) で上演されている。1930年代には反・専制主義の詩やラジオ・ドラマ、演説を執筆し、プラトンの対話を彷彿とさせる実験詩劇『真夜中の会話』 (*Conversation at Midnight*, 1937)、さらにはナチスの暴虐を嘆くラジオ劇『リディツェの殺戮』 (*The Murder of Lidice*, 1942) を発表し、反ファシスト情宣文学との批判も浴びた。1950年10月19日、心臓病でスティーブルトツプの自宅にて永眠。

向こう見ずで夢想的、辛辣で腕白な〈新しい女〉という若き日のミレイの評価は、傲慢で自己中心的な気紛れな女性、と次第に凋落していったが、黒人作家アンジェロウ (Maya Angelou, 1928-) の賞賛によって近年は再評価の機運が高まっているという⁵⁾。

以下にミレイの7戯曲の一覧を掲げる。

邦題 (拙訳)	原 題	初演年
① 『王女は小姓と結婚する』	<i>The Princess Marries the Page</i>	1917
② 『アリア・ダ・カーポ』	<i>Aria Da Capo</i>	1919
③ 『ランプと鐘』	<i>The Lamp and the Bell</i>	1921
④ 『二人のふしだら女と王』	<i>Two Slaterns and a King</i>	1921
⑤ 『王の腹心』	<i>The King's Henchman</i>	1927
⑥ 『真夜中の会話』	<i>Conversation at Midnight</i>	1937
⑦ 『リディツェの殺戮』	<i>The Murder of Lidice</i>	1942

III 戯曲7作品の梗概と論評

① 『王女は小姓と結婚する』(The Princess Marries the Page, 1918, 1932刊)

ミレイの序文によれば、ヴァッサー大学時代に数年がかりで書き上げた⁶⁾もので、1917年5月12日当時25歳のミレイが主役の王女を演じて上演され、この芝居を見て感激したイギリス人女優マシソン (Edith Wynne Matthison) が楽屋を訪ね、ミレイにキスして夏の別荘に誘ったことが契機で二人の間に文通が始まり、明らかに同性愛を示唆するような手紙をミレイが寄せたことは有名である。1932年初版刊行のテキストは、実際このマシソンに捧げられている。『王女は小姓と結婚する』は同年10月22日にベネット校の卒業生によって再演され、翌1918年11月22日にはプロヴィンスタウン劇場でも上演された。その後原稿を紛失し、詩作にかまけて放っておいたところ、ほかの捜し物の最中に偶然探し当てたという。Steepletop在住のその当時、女優のメアリー (Mary Kenedey) と音楽家テイラーが客として来ていて、フィラデルフィアのコスモポリタン・クラブで上演する1幕物をメアリーが求めており、たまたま紹介したこの原稿がうけいれられ、メアリーが王女役で1930年12月22日に4度目の上演がなされたという。

塔の頂上の部屋。開いた大きな窓の棧に痩身にハンサムな小姓が腰掛けて笛を吹いている。部屋の中では大きな椅子に座って大きな本を絶世の美貌の王女が読んでいる。王女は読書の邪魔だから、庭か調理場へ行くように小姓に命じるが、小姓は王女こそ退室するように口答えする。王女は恋物語の一節を音読し、聞きほれた小姓は笛を次第に止め、王女の方も笛の音に魅せられて朗読が緩慢になり、二人は同時に見つめ合う。小姓が面白そうに笑い出すので王女は怒りだす。階段を上る足音が聞こえ、王女は小姓に蔭につかまって窓の外に隠れるように指示する。登場した大法官 (Lord High Chancellor) に王女は、父である国王が金魚にオート麦ビスケットを与えたりクラウン銀貨を入れたりしないように、とか自分の日記を盗み読みしているなら取り返して、と何気ない風を取り繕う。小豆色のダブレット姿の汚い小姓の侵入の有無を大法官が尋ねると、誰一人見かけなかった、と嘘をつき、隠れている小姓に聞こえよがしに、そばかす顔の田舎娘相手に茂みに寝そべって笛でも吹いてるはずよ、と誘導する。大法官の退室後、小姓は他の小姓に発見される恐れがあり、もし城壁にいる現場を目撃されれば、王女が愛ゆえに匿ったという噂が広まりかねないから、と部屋に戻ってくる。〈愛〉という言葉に過剰反応した王女は、田舎娘やスミレ売り娘、裸足の漁師の娘などの恋人はいないのか、と彼に尋ねる。いないという返事に、王女は脇台詞で、見た目は悪くない男なのにと呟く。母親が他界した、と聞いて王女は同情し、蜘蛛の糸が髪についていると偽って払ってやり、自分でも思いがけずに小姓の頬にキスをして泣き出す。宥める小姓に王女のすすり泣きはいっそう激しくな

り、小姓は気を引こうとリングは好きかと尋ねる。小姓は交換するものを求めるが、なにもないと知って王女にリングを差し出す。王女は両手でリスのようにリングにかじりつき、儀礼のキスを許すべく片手を差し出す。小姓は両手でその手をつかんで暫くのあいだ離さない。自分はずっと悲しい男だと語る小姓に、「不機嫌な王」と渾名された、西部の領土を治めている王こそ悲しい人だと告げると小姓は表情を変える。小姓のポケットの中身を知りたがる王女に、妖精避けの縞模様の石(王女は気に入らない)や妖精を呼ぶフルートの音色の貝殻を示す。実際には幾夜も待ち侘びた妖精を小姓はまだ見たことがないし、王女も心底では見たことがない。女は男よりすべての点、とくに知性で優れている、と言う小姓に、王女はそれは間違い、と脇台詞。ポケットの奥に残された書簡を恋人からの手紙と誤解した王女は、嫉妬などしていないし、あなたが死んでも気にしない、と虚勢を張る。小姓は封印された公文書を王女に手渡し、まもなく死ぬさだめであり、妖精を見たいなら貝殻も差し出し、自分は隣国の国王の王子であり、しかもスパイなのだ打ち明ける。衛兵の接近に気づいた王女は逃走を促すが小姓は断り、王女の愛が得られないなら自分の命などつまらない、と語る。王女は小姓を窓外に再び隠し、公文書は本の中に挟んで、二人の声を聞きつけてやってきた3人の衛兵に、騎士と貴婦人の対話を二声を使い分けて朗読していたのだと、即興で繕う。本が上下さかさまだという指摘にも、(偶然にも外国語の本だったので)そういう印刷構成だとはったりを使って納得させ、引き下がる。行き違いに父の国王と大法官が登場。慌てた王女は本を落とし公文書が飛び出すのが気づかない。王女は機先を制して王の冠を直したり、自分の金魚にいたずらしないで、チェスで娘に負けてばかりいるくせに、とまくし立てて話題を逸らして、はぐらかす。大法官は床の本を拾って王女に渡し、公文書も渡しかけるが王女の様子を不審に感じた国王が取り上げ、目を通す。吊り上げ橋や濠(moat)、地下秘密通路の見取図が描かれた文書を見て、スパイの小姓を見なかったか、この文書はどうやって手に入れたのかと質す。床に落ちていたのを葉代わりに使ったもので中身も知らない、と偽る王女に、王は恋文という前言を突いて、詰問する。王女は塔の中に(小姓ではなく)〈スパイ〉はいない、とか塔の〈中には〉いない、と必死に逃げ口上を繰り出し、ついには天国の亡き母に誓ってまでしらを切り通そうとする。この間ずっと窓枠の外に隠れていた小姓は王女を救うために姿を現し、憐憫の情から王女は匿ってくれたと庇う。彼なしでは生きられない、と王女のほうも熱弁を振るう。王は衛兵と大法官を退室させ、小姓に弁明の機会を与えるが、彼は自己弁護をいっさいせず、代わりに服の裏地に縫い込んだ手紙の存在を伝え、国王は読み上げる。17日土曜に秘密通路の扉を開けて侵攻軍の入城の手引きを依頼する父親からの文面であったが、すでにこれは昨日のことで過ぎており、彼はこの命令に背いて従わなかったことが判明する。しかも彼の父・国王は昨日死去したことを王が知らせると、臨終の場において最後を見とりたかった、と嘆く。いまや新国王の地位についた彼に、王は娘との婚姻を許し立ち去る。王女は小姓が吹いていた曲を我知らず口ずさんでいたが涙ぐみ、彼の父の死を悼む。まだ幼いころに見たとき以来、王女を愛し続けてきたと彼は告白し、読みかけの本の結末が分かるようだと言ったと王女が言って、幕が下りる。

登場人物の葛藤や解決に至る筋書きはわざとらしさが抜け切らないし、夢想的ロマンスの要素が色濃い作品であるが、小姓に変装した王子の、信義・忠孝をめぐる心の葛藤にも注目したい。彼はスパイとして他国に侵入していながら実行に踏み切らず、父親の命に背いたのだが、幼少から愛する王女の生命の危険を慮ってのことなのか、スパイという不正な行動を彼の正義感が許せなかったためなのか、明確ではない。

② 『アリア・ダ・カーポ』 (*Aria Da Capo*, 1920)

1919年12月5日、ミレイ自らが演出し、プロヴィンスタウン劇団によって初演。標題の〈アリア・ダ・カーポ〉とは、ABAの三部形式のアリアを意味する音楽用語⁷⁾。以下の粗筋に示すように、コロンバインとピエロが演じるハーレクイン劇がA、サーシスとコリドンの田園詩劇がBで、ABAのサンドウィッチ構成をとっているのが標題の意味であろう。

1幕劇。コロンバイン⁸⁾ (*Columbine*) とピエロ (*Pierrot*) が登場するコメディ・デッラルテ⁹⁾ 風ハーレクイン劇の舞台稽古。伝統の衣装だが、ピエロは白でなくライラック (紅藤) 色、コロンバインはピンク色。マカルーン (クッキー) を頼むコロンバインに、ワインを飲みながら火曜日¹⁰⁾ ならキスしてやると言い、彼女も指の数を勘定できないわ、などと他愛のない会話が続く。ピエロは画家やピアニスト、社会主義者、博愛主義者、女優のマネージャー、批評家、と次々に自称を変えていき、「火災避難装置からチーズを取る女」という奇抜な絵画の標題¹¹⁾ や「6時の上り急行列車」という曲名を考えたり、「人類は愛するくせに、人々は大嫌い」なのが社会主義者である、などと警句を連発する。

舞台にコウサーナス¹²⁾ (*Cothurnus*) 登場。出番ではないが待ちくたびれたから登場したいと繰り返すのでピエロも了承する。コロンバイン、遅れてピエロ退場。

コウサーナスは楽屋のサーシス¹³⁾ (*Thyrsis*) とコリドン¹⁴⁾ (*Corydon*) を呼び寄せる。喜劇用舞台設定のままでは悲劇は演じられないし、必要な壁を薄葉紙 (*tissue paper*) で作るわけにはいかない、と二人は気乗り薄だが、コウサーナスに促され、机や椅子を片付けて床に座り、演じ始める。台詞を忘れ、コウサーナスからプロンプトを受けたりしながらも、クレープ紙で壁を作る。水溜まりがあるのはサーシス側のみで、羊に飲ませる水が得られないコリドンは、ゲームだから止めようと提案するが、サーシスは相手にしない。ところが今度はコリドンが自分の側の領地に金^{きん}や宝石 (紙吹雪で代用) が埋まっているのを発見する。眠っていたサーシスは水と宝石の物々交換を申し出るが、この財宝で皇帝になって美女たちにかしづかれ、〈コリドン橋〉を建設して永劫に名を残せるのに、どうして羊飼いやでいられるか、と無視して宝石を数え上げる。しかしやがて喉の渇きがコリドンを襲い、彼は金と水との交換を申し出るが、今度はサーシスが1時間後にと焦らし、椀一杯の宝石との交

換を持ちかける。コリドンは3つの長いネックレスを約束してサーシスの首にかけ、サーシスは草の根を粉末にした毒薬をワインに混ぜてコリドンに飲ませる。コリドンは首を強く締め、ついにサーシスは息絶える。毒が回ってきたコリドンも壁を越えてサーシスの側に倒れこみ、彼のマントを自分の肩にかけて死ぬ。コウサーナスは台本を閉じ、二人の上にテーブルを置きカバーをかけ、役者からは見えないが、観客には見える状態にする。コロンバインとピエロが戻り、散らかっている紙吹雪を片付けるが、テーブル下の死体に気づいてコウサーナスに撤去を命じる。しかし、テーブルクロスを降ろして客席から視界を遮れば観客はすぐに忘れる、との返事に、二人は同意し、冒頭の演技のやりとりを繰り返す。

この芝居が初演当時、反戦劇と見なされたと言えれば意外に感じられるかも知れない。いったいこの劇のどこに反戦思想の要素があるのか、と。それは終末近く、二人の羊飼いが重なり合って倒れている〈舞台〉において、「テーブルの下に死体が二つも転がっているのに座って食事などできない、観客も堪え難いだろう」と言うピエロに、「見えなくすれば観客は忘れてしまうから、そのまま笑劇を演じろ」とコウサーナスが平然と答え、ピエロがすぐに納得してしまうくだりである。「この世はすべて舞台」というシェイクスピアに倣えば、舞台こそは全世界の象徴であり、そこでは富や領土をめぐる騙し合いの戦いが繰り返され、勝者も敗者もないまま、ともに死んでいく。サーシスやコリドンが本当はこの不毛な芝居を演じたくはないにも関わらず、プロンプトを受けて操られていく様は、目に見えない権力によって戦場へ駆り立てられた兵士を彷彿とさせるだろう。そしてわれわれはすぐ身近に、まさに足元に戦死者がいるのに、きちんと弔うこともなく、戦死者の存在をすっかり忘れて飲み食らい、陽気で馬鹿げたハーレクイン劇の日常をいつまでも続けている。第1次大戦が終わった翌年の暮れの上演だけに、観客のなかには息子や父、夫を戦争で亡くしたことを示す金星章を付けた遺族もいたに違いない。彼らはそこに反戦のメッセージを敏感に読み取ったことだろうが、〈観客はすぐに忘れる〉という台詞は、大戦の悲劇と無縁な平和ぼけな日常を営んでいる大多数の観客に向けられた痛烈な揶揄なのである。

③ 『ランプと鐘』 (*The Lamp and the Bell*, 1921)

母校ヴァッサー大学の同窓会創立50周年記念に委嘱されて書き上げたエリザベス朝風の5幕劇。グリム童話 (KHM [Kinder-und Hausmarchen] 161番) の『雪白とばら紅』 (*Snow White and Rose Red*) に取材したとされる。

前口上で、後に先立たれ、一人娘のいる王が、やはり娘のいる女性と再婚、二人の異母姉妹は遊び

仲間として成長するという枠組みがアンセルモ (Anselmo) とルイージ (Luigi) によって提示される。1幕は、再婚後4年経ったフィオリ (Fiori) の宮殿の中庭。主な登場人物は、先妻の娘で勝ち気なくばら紅> ビアトリス (Biatrice), 王妃オクティヴィア (Octavia) の連れ子の<雪白> ビアンカ (Bianca) [イタリア語でビアンカは文字通り<白>を意味する], リュート奏きの道化フィデリオ (Fidelio), 国王ローレンゾウ (Lorenzo) の甥で私生児のグウイドウ (Guido) , このグウイドウに恋する娘フランチェスカ (Francesca) である。ビアンカは、どちらが先に結婚するだろうか、結婚後もいつまでも友達でいられるか、と問いかけ、ビアトリスは彼女をやさしく庇護する。娘二人がいつも一緒にいるのは教育上良くないと王妃は考え、ビアンカはよそへやられる。4か月後の2幕になると、来訪したラゴヴェルディ王マリオ (Mario) とビアトリスは相思相愛の関係。グウイドウは嫌われているがゆえにビアトリスに引きつけられ、仲違いして熱が醒めたフランチェスカはもはや眼中にない。彼はビアトリスの恋愛を邪魔するために、王妃に進言して、ビアンカを呼び戻してマリオとの縁談をもちかける。3幕は翌年の夏で、ビアンカは婚約者マリオの個人的な評価をビアトリスに訊き、結婚しても絶対にビアトリスのことは忘れない、と語る。二人はそれぞれに相手のことを暗闇を照らす<ランプ> (=ビアトリス), 居場所を知らせるべく鳴り響く塔の銀<鐘> (=ビアンカ) と形容する。風にも吹き消されぬ赤いランプの炎, 白銀の鐘 (鈴) の透明感は、それぞれの呼称の赤, 白に呼応する。ビアトリスはマリオがビアンカと結ばれても、人情の機微だからと彼の心変わりを責めたりせず、ビアンカの幸福を喜ぶ。やがて婚礼の舞踊が繰り上げられるなか、国王ローレンゾウが急死する。ビアトリスと父の死を悼むために、新婚初夜の晩にビアンカは夫を遠ざける。4幕はその後5年が経過している。王位を継承した女王ビアトリスは狩りのさいに山賊に襲われて怪我をし、マリオも殺されたことが知らされる。かつてビアトリスはマリオを愛していて、マリオ亡きいま、足が遠のくのは当然至極と、未亡人ビアンカは母親に嘲笑され、彼女は事実確認にビアトリスのもとを訪ねる。噂の真偽を問うビアンカの台詞を誤解したビアトリスは、山賊に襲われた際に救出に来たマリオを誤って刺殺してしまった秘密を漏らしてしまう。2年後の5幕は、ビアトリスに未練のあるグウイドウが王位篡奪の陰謀を練っている。ビアンカ危篤と知ったビアトリスを兵士が捕らえ、必ず彼のものになるという条件でグウイドウはビアンカ訪問を許す。二人の子ども (ともに娘で「小さな雪白」「小さなばら紅」と渾名されている) を託す遺言をビアンカは召使に伝え、現れたビアトリスを抱擁してまもなく息絶える。悪党のグウイドウは刺殺され、フランチェスカも溺死 (入水自殺), さらにフィオリの民衆が決起してグウイドウの軍勢を排除したとの報が届けられる。ふたりの間の絆は決して揺るがないことを示唆するビアンカの遺言が侍女の口から届けられ、ようやくビアトリスは和解と心の平安を得る。

冒頭に記したグリム童話『雪白とばら紅』¹⁵⁾の原作の粗筋は次の通り。——夫を亡くした貧しい女性と2人娘の住む家へ冬の寒さに凍えた大きな黒熊が訪ねてきて仲良く

遊び、やがて春の到来で熊は去る。2人娘は森や小川や原っぱで3度こびとに出会い、彼の窮状（倒木に長い髭が挟まって身動きが取れない、釣糸に髭が絡まって魚に引っぱられる、驚にさらわれそうになる）を救ってやるが、恩知らずで怒りっぽいこびとは髭を切られたり服が痛んだのを怒る。その後、こびとが道端に宝石を並べて見とれているところに2人娘が通りかかり、突然森の中から黒熊が現れてこびとを襲い、殴り殺す。熊は毛皮を脱ぎ捨てると、金づくめの長身の王子の姿を現し、こびとの魔法で熊にされ、財宝を奪われていたのだと説明する。数年後、白雪は王子と、ばら紅は王子の弟と結ばれ、娘たちの母親も城で暮らす——。勝ち気なばら紅、おしとやかな白雪という姉妹の性格の類似を除けば、グリム童話『雪白とばら紅』とミレイの『ランプと鐘』には多くの相違点があり、特に重要な違いは次の2点だと思われる。

(a) 童話に登場する2人娘は実の姉妹であり、異母姉妹ではない。

〈連れ子を持つ女性と王の再婚〉や〈継娘に反感を抱く継母〉といった設定やモチーフは原作には見られない。

(b) 王子をめぐる2人娘が互いに複雑な恋愛感情を抱くことはない。

王子が雪白と結ばれる童話の結末はミレイの戯曲と同じであるが、なぜ雪白の方が選ばれたのかは言及がなく、王子の心変わりや身を引くばら紅の気配りなど、姉妹間の微妙な心情の機微や王子をめぐる三角関係は描かれていない。

④ 『二人のふしだら女と王』 (*Two Slatterns and a King*, 1921)

これもヴァッサー大学で初演されたもので、1幕の道徳的幕間狂言 (moral interlude)。

悪玉¹⁶⁾チャンス（「巡り合わせ」）の前口上で幕開け。彼は劇中にも登場するが、他の登場人物からは見えない設定。国王が登場し、権力絶大にも関わらず余は満ち足りぬと言うと、お后様がないからだと言及が指摘。偽のふしだら女タイディ（「こざっぱり」）が登場し、台所の整理整頓や身体の清潔を自慢する。真のふしだら女スラット（「ぐうたら」）が登場し、不潔で懶怠な生活ぶりを吹聴する。結婚の決意を固めた王は、台所をもっとも清潔にしている娘を娶るつもりだが、前もって準備されぬようにお忍びで探しに出る。さて、タイディは夜明けの1時間前から起き出して家事に精を出したにも関わらず、牛乳は日なたで腐り、焼き鴨は近所の犬が引きずり回し、その犬を必死に追いかけている隙に台所には蠅が侵入、干した洗濯物は落ちて泥まみれ、オープンにかけたタルトからは煙が立ち上り、煮込み途中のマルメロ・ゼリーは床に炊きこぼれ、つかんだ箒で柱時計のガラスを割るわ、棚から食器が落ち怪我までする始末。涙で前が見えずに椅子につまづき、つかんだテーブルは横転して卓上のすべてが投げ出される。まさに泣きっ面に蜂、踏んだり蹴つたりの災難続きだが、折

悪くそこに登場した王はもちろん、彼女を王妃失格と宣言、タイディの弁明を無視して立ち去る。続いて小綺麗な出で立ちのスラットが登場。彼女は無聊な生活に飽き飽きして、生まれてこの方一度もやったことがないこと——部屋の掃除——に取りかかった。しかし体の節々が痛むし、清潔な部屋にいては落ち着かないからじきに元の惨状に戻るだろうと語る。そこへやってきた王はすっかり誤解してスラットに求婚し、彼女とともに退場。やがて片付けを終えたタイディのもとへ王が再び現れて彼女に求婚するが、すでにスラットと結ばれた王は自分の性急な判断を嘆く。冒頭のだらしない格好でスラットが現れ、法律上の妻という合法的身分を主張し、死ぬまで外出しないように王に言い渡し、王と退場。「小綺麗にするのはなんて楽しいんでしょう」とタイディは言って、退場。納め口上に立ったチャンスは、物ごとがうまく運ばないのは巡り合わせゆえであり、物笑いの種にされたくないければ、拙速に決断しないこと、この掟を守れぬ者は愚か者と呼ばれるだろう、と締めくくる。

配偶者選択の基準に、容貌や氏・素性や知性ではなく、台所と身嗜みの清潔さ——そしてそこから推測される実直・勤勉さなどの性格の良さ——を掲げて、お忍びで配偶者探しと世間の実態見聞に出る為政者の思いつき自体は悪くはないが、目にした一瞬の情報を真に受け、持続的な観察や熟慮を怠った王の早急な判断の愚かさを戒めるもの。思わぬ玉の輿に上ったスラットは幸運だし、判断を誤った王に嫁がなかったタイディも結果的には我が身を嘆いていないから幸運だと言えよう。人はみかけによらない、という世俗知を実証する物語。

⑤ 『王の腹心』 (*The King's Henchman*, 1927)

10世紀のイングランドを舞台とする3幕劇。作曲家・音楽評論家テイラー (Joseph Deems Taylor, 1885-1966) のオペラの歌詞台本として執筆された。

第1幕 王妃を亡くしたウェスト・サクソン人の王アドガー (Eadgar) = エドガー¹⁷⁾ (Edgar, 944-975) は再婚相手を探している。彼は乳兄弟のエゼルウォルド (Æthelwold) をデヴォンに派遣し、この土地の豪族の娘エルフリーダ (Aelfrida) が王妃として相応しいかどうかを調べさせようとした。かつてエドガーを猪から救ったこともある勇猛な戦士エゼルウォルドは王の忠臣だが、女嫌いな彼は気乗り薄である。

第2幕 ハロウィーンの晩のデヴォンシャーの霧深い森の中。エゼルウォルドとその家来で豎琴奏者のマッカス¹⁸⁾ (Maccus) は道に迷う。マッカスが助けを呼びに離れ、エゼルウォルドがうたた寝をしている最中に、エルフリーダがその姿を見つけて起こし、お互いに恋に落ちる。ほかならぬ彼女が王の意中の女性と悟ったエゼルウォルドの心は乱れるが、エルフリーダは美女ではなく王妃として不適格、しかしながら彼女の父親が金持ちであるから自分は彼女と結婚する旨を、マッカスに伝

えて王の元へ急がせる。

第3幕 翌年の春。一目惚れの相思相愛で結ばれた二人だが、すでに不和の兆し。良心の呵責を味わい、戦士としての生活から遠ざかっているエゼルウォルドはいまの生活に満足できないし、エルフリーダも家庭に閉じ込められるよりもウィンチェスター宮殿での華やかな生活に憧れている。エゼルウォルドは大陸のフランダース地方のгент(Ghent)に新しい衣服の買い物に出かけることを提案し、妻も喜ぶ。しかしこのとき、マックスが現れ国王の不意の来訪を告げる。エゼルウォルドの目には、国王と「恥辱」と「宿命」の三者が見える。危険を察知したエゼルウォルドはこれまでの経緯を妻に正直に打ち明け、王妃になれたかも知れないとの思いを抱きながらも、彼女は夫の指示に従って、醜女の変装をしてあずまやに身を隠す。醜女との婚姻を国王はしきりに気の毒がり、エゼルウォルドはいたたまれなくなる。気分がすぐれずあずまやにいるというエルフリーダを王が見舞いに行くと、彼女は美しい衣装に身を包んでその美貌の姿を見せる。国王は驚き、同時に真相を悟って悲しむ。裏切りの恥辱に耐えきれずエゼルウォルドは自害する。エルフリーダは皆から軽蔑され、夫の死体からも離される。

以下の引用(a)はエドガー王が惚れ込むほどの堅物エゼルウォルドの女嫌いの台詞、(b)ではその彼が豹変して、王に言付ける偽りの報告の内容、(c)は麗人エルフリーダの姿に驚愕し、同時にエゼルウォルドの裏切りを悟ったエドガーの苦悩の台詞である。

(a) エゼルウォルド わたしは無駄な言葉は申しません。

しかしデヴォンの件では一わたしは遣わすのに適材ではありません。女的美醜など私にどうして分かりましょう

女など私には さながら溝のなかの枯葉のごときもの

ざわざわと音を立てる娘たち

ちょっと美人で ちょっと不細工

だがみんな 似た者同志 そしてもものすごく邪魔になる!

エドガー だからこそ そなたを遣わすのだ

そなたなら 目が眩み気絶して落馬することもあるまい

デヴォンくんだりの女のかぶりものを初めて見た途端に。(26-27)

(b) エゼルウォルド マックス、王のもとへ戻り

以下のように王に伝えてくれ

(彼は間を置き、早口で続ける)

例の娘の姿を見たが

すこしも美しくはなかったと
たしかに見苦しくはなく うちとけた話しぶりだが
王にはまったく似つかわしくないと (79)

(c) エドガー

そういうわけか…そういうわけか…

(彼は黙ったままエルフリーダからエゼルワールドに視線を転じる)

ああ、ならば (ゆっくりと) わが人生は空の甕の下に敷かれた、
棒切れの山にすぎなかったわけだ。

[中略]

そなたが…そなたが…信じられぬ。わが心は、そなたに寄せる全幅の信頼と
いう美食を堪能してきたが、この度の食事の匂いを嗅ぎ、顔をそむける。(124
-126)

⑥ 『真夜中の会話』 (*Conversation at Midnight*, 1937)

ミレイの序文によれば、メキシコ湾のサニベル島のホテルに投宿し、荷物だけ預けて部屋にも寄らずに浜辺での貝殻集めに熱中していたところ、ホテルが炎上しているのが見えたという。こうしてこの作品の原稿は焼失し、記憶を頼りに部分的に書き改めたのが本稿であり、一見したところ物語詩のように見えるが、描写の部分は僅かであり、全面的に〈対話〉と見なしたほうがよいと述べている。煩雑なト書きは割愛し、便宜上4部構成にしてあるが、会話は一貫して継続していると断っている。初演された1937年はヨーロッパでファシズムの脅威が次第に拡大していた時期である。1933年にナチスが政権を獲得し、34年にはヒトラーが総裁に就任、35-36年にかけてイタリアもエチオピアを侵略して併合、大戦勃発に向かってきな臭い動きが確実に広がっていた。

現代のニューヨーク5番街の西にある10番通りのリカードの家の居間。夕食が済みコーヒーも終わって客人たちが居間に姿を現す。マートンは68歳の富裕な株式仲買人。詩と馬を愛し、リカードの夕食会に頻繁に訪れる。プロテスタントで保守的。ジョンは天分はあるのに世に認められない45歳で長身瘦軀の画家。最高傑作はマートンの肖像画だが、本人は気に入らない。40歳で好男子の短編小説家ピグマリオン(渾名)は経済的に恵まれている。ピグマリオンとはハーバード大学同窓のカールは43歳で共産主義者の詩人。35歳前に2冊の詩集を刊行し、近刊の3冊目はリカードを魅了した。[彼は劇中でジェファーズ(John Robinson Jeffers, 1887-1962)の「喜び」("Joy")という詩を引用する。]二人はバルセロナ行き貨物船の唯一の乗客だったが、10日間互いに口を利かず11日目にイルカ

とネズミイルカの違いで口論を始め、以後話が弾んだ。アンセルモ神父はフランシスコ会のカトリック司祭で45歳。リカードと同郷の北イタリアの村の出身で幼馴染み。イタリア小貴族の父とアメリカ人の母の間に生まれたリカードは、父からは美貌と貴族性を、母からは土地財産と温和な性格を受け継いだ。両親はすでに他界している。25歳の美貌のルーカスは父親の死でイエール大学を中退、父の親友だったマーティンの世話で広告業に従事し、母と妹2人の住むマジソンから通勤しているが、留守中の友人のニューヨークのアパートにいまは暮らしている。

上述の主要登場人物7人は対照的に選ばれている。財産と年齢の点で対照的なのはマーティンとルーカスであり、他の5人はいずれも40代。政治的立場からは共和党支持者マーティン、共産主義者カール、政治に幻滅した皮肉屋ピグマリオンが対立。宗教的立場では、カトリックのアンセルモ神父、不可知論者のリカード、宗教心はあるが没入できないジョンが対立する。

7人の人物の会話が狩猟や女性、社会問題などをめぐって延々と続く作品だけに要約は困難であり、標題『真夜中の会話』にも関わり、ドイツやイタリアの台頭の話題が言及される一節だけを以下に引用しよう。

ルーカス ちょうど12時です。午前でも午後でもなく、午です。

マーティン 真夜中だな。ニュー・ヨークでは真夜中。パリはもう夜明け間近だろう。

ジョン 違うかも知れませんよ。あいにくパリでも真夜中でしょう。空襲を恐れるかのように、世界中が暗闇の中を回転しています。

眼前の自分の手さえ、だれひとりの目に映らずに。

ピグマリオン きっとムッソリーニなら自分の手袋の輪郭が暗闇の中でもよおく見えるでしょう。そしてヒトラーの延ばした手は彼には立派な白い塊でしょう、時刻の如何にかかわらず。

(中略)

リカード ヒトラーは違います…彼は青白い顔に口髭を蓄えた、ソーダ水容器のジークフリートだけど、ある種のジークフリートなのです。退屈だけど、英雄的なのです、ドイツの成したことは。(97-98)

なお、この作品は1961年11月にロサンゼルスで上演された際には16週間のロング・ランを記録したが、1964年のニューヨーク公演はわずか4日であっけなく幕を閉じたという。

⑦ 『リディツェの殺戮』 (*The Murder of Lidice*, 1942)

『リディツェの殺戮』のリディツェは、ボヘミア中西部の村の名前で、1942年5月27日ヒトラーの腹心でドイツ国家保安部長官(1939)のハイドリッヒ(Reinhard Tristan Eugen Heydrich, 1904-42)、通称「絞首刑執行人」‘der Henker’ (the hangman) の暗殺¹⁹⁾に対する報復措置として、この村は6月9日の深夜から10日にかけてナチスによって抹殺された。テキスト序文に掲げられた「作家たちの戦争委員会」(Writers' War Board)の声明によれば、この作品は同委員会がミレイに委嘱して誕生したものである。1942年6月10日、当時のチェコスロバキア、プラハの西20キロに位置する小さな村リディツェをドイツ政府が攻撃、聖マーガレット教会を含む建造物を破壊し、司祭を含む男性全員と女性52人を殺害、残りの女性を収容所へ、子どもたちを「教育施設」へ連行し、世界地図と人々の記憶からリディツェを永久に殲滅したと発表した。ハイドリッヒ殺害犯を村人が匿っているという、未確認で事実²⁰⁾にも反する容疑に基づく蛮行であった。

26連からなるこのラジオ劇は、冒頭で2つの声が聞こえ、最初の声が語り手となって悲劇を物語る構成をとる。700年以上前にボヘミアのダヌーブの肥沃な草原に人々が互いに手を貸し合って作られたリディツェ村では季節に応じて農作業が営まれていた。物語りは16歳の娘ビエタ(Byeta)と鍛冶屋の息子カレル(Karel Horak)の恋愛が主軸になって展開する。ふたりは婚約し、娘は両親に6月10日の挙式を申し出る。やがて死刑執行人ハイドリッヒが村へ来るという情報や、負傷した彼が死亡し村人が犯人を隠匿していると疑われていることがビエタの父親ミルコ(Mirko)の耳に入る。犯人情報の提供者に20万クラウン金貨の報償金のピラが撒かれる。ハイドリッヒが墓の中で叫ぶ声やコウモリの鳴き声、羽目板のきしみの幻聴に苛まれるビエタは耳を塞いで家中を走り回る。宥める母親アナ(Anna)に父親は、それは予言的な第六感であり、村全体に危険が切迫していることを告げる。深夜、両親は他の子どもたち(1男3女)を起こし、死を目前にして最後の別れの会話を交わす。息子の髪を短く切らないでいたら女の子と間違えられて助かっていたのに、と嘆く母親。やがて捕らえられた200人の男たちが一列に広場へと歩かされる。建物には一斉に火が放たれ、歩行不能の母親を助けに血まみれの道路を這うようにして進む息子がいる。忠実な犬たちは主人の死体から離れず兵士に蹴り殺され、女と子どもはトラックに乗せられてドイツ男の性的奴隷あるいは、ドイツ式再教育を受けに連行される。赤子をベッドの下に隠した母親は熱病だと拒むが、運悪く泣き出した赤ん坊の頭を兵士は壁におつけ、必死に止めに入った母親は射殺される。臨終の男に祈りを捧げていた70歳の司祭は撲殺され、臨終の男も教会もろとも焼死するなどの地獄絵が描写される。カレルはビエタの自宅前の階段で事切れ、ビエタはみずから剃刀の刃で喉をかき切って好色なドイツ兵の目前で自害する。飛び散った血飛沫で軍服を汚されたドイツ兵は悪態を吐いて立ち去る。

最終3連はミレイの政治的主張をこめた訴えとして用いられる。虐殺の起きた1942年6月10日を決して忘れずに、われわれもまたリディツェの民衆であるという真剣な当事者意識を持って日常生活を営むべきであること、いたいけな子どもまで虐殺した蛮行に復讐を誓う呻き声が世界中から沸きあがって虐殺者の耳に届いているけれども、このままぐずぐずしていれば戦禍はアメリカにも飛び火して、イリノイ州リディツェ町²¹⁾までもが破壊されてしまうと、ファシズムに免疫があると高を括っている〈迂闊なアメリカ〉(Careless America)の国民に呼びかけ、はやく彼(ヒトラー)をつかまえ、決してアメリカ上陸をさせてはならない、と繰り返している。

史料によれば、ミランという青年が恋人マリに宛てた書簡が検閲を受け、そのなかの一文「僕は僕の心に従って成すべきことをやり遂げたよ」が暗殺告白と当局に曲解されたことに虐殺の発端があったとされる²²⁾。作品に登場するビエタとカレルという名前の恋人がリディツェ村に実在したのか、まさに虐殺の日に二人の結婚式が予定されていたのか、その真偽は確認できないが、おそらくこの偶然の設定はミレイの虚構と思われ、若い恋人を悲劇的犠牲の中心人物に据える描き方には「感傷過多なバラッド」²³⁾という批判(Paula L. Hart)もあるけれど、感傷を排除した作品を書くことは事件の性質や時代の切迫状況を考えればできないことだっただろう。それよりも、「彼(ヒトラー)にここ(アメリカ)へ来させてはならない！」(Never let him come here!)という最終連の主張に、アメリカ国民の利害や安寧を優先的に考慮した偏狭な響きをいささか感じとるのは邪推であろうか。この間の執筆事情や動機をもう少し詳しく調べたいのだが、残念ながらミレイ書簡集には1942年のものは2月14日と推測される一通しか収められていない。事件にもっとも日付の近い1943年7月の書簡では、Gene (Eugene Saxton)の死を嘆き悲しみ、その助手のエイミー(Amy Flashner)に経済的窮状を次のように訴えている。——「お金が得られないなら、書くこともできないし、なにもできません。政府のために仕事をすること、戦争に勝つために少し役立つかもしれないことをすることはまったくよいことですが、去年はそれにかかりきりになって——作家たちの戦争委員会、赤十字、ニューヨーク・タイムズ女性会議(否、それは今春のことでしたが、とにかくニューヨーク・タイムズはその費用も支払ってくれませんでした)——要するにいまや私は無一文です²⁴⁾。」——たびたび放送されることのないラジオ劇、反戦作家組織からの大至急の委嘱という特質を考えれば、この作品でミレイが経済的恩恵を受けたとは想像できないが、それでもなにか淋しい気持ちにさせる書簡である。

IV ミレイ戯曲の主題や技巧について

ミレイの戯曲7作品をこれまで概観してきたが、扱われた主題や用いられた技巧をここで簡単に振り返ってみよう。まず、『王女は小姓と結婚する』は概してロマンチックなお伽話的雰囲気作品で、演じ方次第では学芸会向けパントマイムに墮する危険も孕んでいる。名門女子大学のキャンパス上演演目に相応しく、恋人同志の熱い抱擁や接吻などの際どい場面もない。快活で一途でありながら、ときに繊細な少女らしいはにかみを見せる王女は、同性からも支持される性格の持ち主であり、彼女に幼いころから思慕を寄せてきた他国の王子とその王女がめでたく結ばれる大団円には、暗く深刻な思想的陰影は微塵もない。句跨がり (run-on) の多い無韻詩^{フランクヴァース}で書かれているが、文体は混交しており、王女の朗読する物語詩の一節はテニソンあるいは前ラファエル風であり、『真夏の夜の夢』などのシェイクスピア劇を彷彿とさせる台詞や、ウェブスターなどの後期エリザベス風の台詞もあれば、王女の台詞には平易な口語表現もある。在学中にミレイが勉強した「イギリス演劇」の講義の影響をこの伝統的詩形の混在に見ることもできるだろう。〈王女と小姓〉という組み合わせはワイルドの『サロメ』の序盤を連想させるが、ミレイの小姓が実は変装した王子で、最後に王女と結ばれる結末を考えれば、「宿命の女」サロメに利用されたあげくに憤死する哀れな小姓に過ぎない『サロメ』劇の関係とは本質的に異なる。

第2作『アリア・ダ・カーポ』は、コメディア・デッラルテのハーレクイン劇のなかに悲喜劇の田園詩劇を取り込んだ構成の道德劇。リハーサル風景を題材とするメタ演劇の要素をもち、現実と虚構が入り交じった展開——たとえば田園詩を演じた二人はずっと動かず、そのまま本当に舞台上で死んだようにも読める——は、読者に不安な居心地の悪さを残し、不条理演劇の雰囲気さえ漂う。仲のよい羊飼いが領地争いで醜い揉め事を起こし、ついには互いに殺し合う芝居の前後に、荒唐無稽で風刺的なハーレクイン劇を重ねたこの作品は、基本的には茶番であると同時に、争いの無益さや人生の空虚さを垣間見させ、第1次大戦後まもない初演時には反戦の主張が託されているとも評された。

第3作『ランプと鐘』は、これまでの1幕物からいきなり5幕の大掛かりな芝居になる。登場人物として名前が列挙されている役柄だけでも48を数え、さらに通行人や市民など端役が大勢登場する。2幕2場のパントマイム、3幕1場の婚礼祝賀の生花が集められる場面、同4場の婚礼舞踊場面、4幕1場の市場の場面は視覚的にも圧巻である。しかも、前2作の比較的単純なカップルの恋愛ではなく、男女の三角関係が二重にもつれて展開する。すなわち、〈フランチェスカ・グウイドウ・ビアトリス〉、

〈ピアトリス・マリオ・ピアンカ〉の三角関係であり、事故死（マリオ）と故殺（グウィドウ）の差はあれ、捨てられた女によって男が殺されている点が共通する。ミレイが認めているように、こうした男女の纏れに端を発する復讐劇はエリザベス朝演劇の特色を模したものであろう。馴染みの深いグリム童話「雪白とばら紅」を下敷きに、シェイクスピアの『じゃじゃ馬馴らし』(The Taming of the Shrew)の男勝りのキャサリーナ(Katharina)とおとなしいピアンカの姉妹をおそらく念頭において、若い女性同士の親密な友情や信頼を丁寧な筆で描いている。血縁のない義理の姉妹とはいえ、若い娘たちが余りにも懇意になることは、一種の近親相姦に走る危険性を孕んでおり、後妻オクテイヴィアの危惧もまったく根拠のないものとはいえないだろう。ミレイ自身の同性愛的傾向と無意識の禁忌意識が、度を越えない親密さに反映されているように思われる。

第4作『二人のふしだら女と王』は、外見と現実、みせかけと中身の不一致を教訓交じりに描いた寸劇で、類型化された人物像に世俗的な教訓を盛り込んだ、分かりやすく娯楽性の高い作品である。

以上の4作品はいずれも1917年から21年にかけて初演されたもので、ミレイの20代後半（25歳から29歳）にあたる作品であり、執筆時期は数年溯る大学時代と想定されることから、様々な戯曲形式を試みた習作群とみなすことができ、主にロマンティックな恋愛や同性間の友情を中心に据えた主題や内容に、ある種のまとまりや統一感が見てとれる。

しかしながら、ミレイ35歳のときの第5作『王の腹心』は、はるか10世紀のイングランドに時空を越えて舞台設定された歴史劇で、これまでの作風から一挙に脱却した感がある。公と私の葛藤、自己欺瞞の代償の重さ、男同志の信義、名誉や誠実さの主題が古風な文体、とりわけ1幕では時代考証にも耐える、意識的な古英語の語彙を駆使して描かれている。伴侶探しに自ら歩き回った挙句にしくじる、前作『二人のふしだら女と王』の滑稽な国王と違い、エドガーは側近の乳兄弟に伴侶候補の資格審査を命じるのだが、彼もまたはかばかしい成果は得られない。夫の命令に背き華麗に着飾って王の前に姿を現すエルフリーダの愚挙には、女の浅薄な虚栄心、理性や自制心の欠如が描かれている。異母姉妹の葛藤を描いた第3作『ランプと鐘』のように、『王の腹心』では異母兄弟（乳兄弟）の信頼関係の破綻が描かれており、両作品は同じ主題の女性版と男性版の関係にあるとも解釈できる。但し『ランプと鐘』では裏切った側のピアトリスに和解の平安が最後には得られるのに対し、『王の腹心』では裏切りはエゼルヴォルドの自害によってのみ贖われ、死による贖罪という高価な代償を背信者に要求している。血を分けた実の兄弟・姉妹間ではなく、運命的な絆で兄弟姉妹となっ

た2人であるがゆえに、むしろいっそう激しく信義に執着・拘泥するのかもしれない。

45歳のときの第6作『真夜中の会話』はさらに一転して現代のニュー・ヨークを舞台に、多様な境遇や性格を持つ7人の男たちが政治や宗教などをめぐってとりとめもなく議論する対話劇であり、きわめて実験的色彩が強い。第2次大戦へと突入していく時代背景や劇作家の加齢による成熟を反映して、政治的発言に力点が移動している。50歳の第7作『リディツェの殺戮』は、現実の惨劇に直接抗議するアジットプロップに属する作品だろうが、戦争を憎む心情を平易なプロットと文体のなかに真正直に吐露しており、いまなお訴える力のある秀作である。

V おわりに

初めての作家や作品を読むのは新鮮で楽しくもあれば、時代背景や地理、伝記的事実の知識の欠如から、迷路に足を踏み入れたような不安感にも襲われる。まして詩人ミレイの戯曲は当然ながら詩劇の形態をとり、現代の平易な散文や口語表現には慣れていても韻文が苦手な筆者には荷が重かった。ミレイに関する研究書の多くは詩を対象としており、末尾に掲げた評論集などにおいて、戯曲を扱った部分は断片的であまり役立たなかった。本論はしたがって、専門外の人間が限られた資料を用いて能力の範囲内でミレイの戯曲を読み進めた報告の域を出ない。誤読や理解不足の箇所をご指摘いただければ幸いである。

リディツェ村の惨劇について筆者はミレイの芝居を読むまでまったくの無知であった。手元の歴史年表を調べてもリディツェの記述はない。現代史は膨大な数の事件で溢れていて、この惨劇もいまや語られることが少なくなったのだろうか。1957年にイギリスはこの村に巨大な追悼バラ園の建設を指揮し、50周年にあたる1992年6月には数千本の植樹を行ったという。今年ちょうど惨劇から60年目にあたるのだが、新聞数紙をくまなく探しても関連記事は見つからなかった。ミレイの『リディツェの殺戮』、あるいはこの事件自体が時代の流れに屈して忘れ去られてしまったのだろうか。暗殺テロリストの潜伏先と目されたチェコの小村を殲滅したナチスの暴虐を激しく糾弾したミレイがいまもし生きていれば、テロリスト、ビンラディン潜伏先のアフガニスタンの町に空爆を繰り返した母国アメリカの非道にたいして、いったいどのような態度を表明するだろうか。アメリカはいつまで〈迂闊な〉ままでいつづけるのだろうか。

本稿は2002年6月29-30日にキャンパスプラザ京都で開催された全国アメリカ演劇研究者会議第19回大会第1日の研究発表の準備草稿として書かれたものです。当日、司会を担当いただいた立命館大学・山本俊一先生に感謝申し上げます。

注

- 1) Judith Thurman, 'Siren Songs: The poet-diva Edna St. Vincent Millay is the subject of two new Lives', *The New Yorker*, Vol.77, No.25 (September 3, 2001), p.88.
- 2) 1865年、英国生れの醸造業者Matthew Vassarが創立した教養大学。1969年より男子学生を受入れて共学化に踏切り、現在男女比は2:3。
- 3) Jenny Stringer (ed.), *The Oxford Companion to Twentieth-Century Literature in English* (Oxford: Oxford University Press, 1996)
- 4) たとえば、エドモンド・ウィルソン (Edmund Wilson, 1895-1972) の小説『デイジーに思いを馳せた』 (*I Thought of Daisy*, 1929) は1920年代のグリニッジ・ヴィレッジの青春像を描く作品で、登場人物のリタ・キャバナ (Rita Cavanagh) という詩人はミレイをモデルに造型された。1920年春に出会った憧れの詩人ミレイ (28歳) と7月に彼 (25歳) は初体験をし、8月にはケイブ・コッドまで追いかけて求婚したが、愛想良く拒絶された。翌年パリまで会いに出かけたが、すでに燃え尽きていた彼はその後は友人として付き合っていた。ところがリタとしてミレイの追憶を描くうちに焼けぼっくに火がついて、彼は1929年この小説の完成原稿をミレイに送り、リタ像への論評を求めた。生き生きと描かれているけれど、会話になると生気が失せる、という趣旨の4頁の返書をミレイは書いたが、郵便が途中で紛失し、1948年二人の最後の出会いとなった折、気分を害した余り返事を書きたくなかったのだらうとウィルソンは思い込み、返書の内容を知ったのはミレイの死後1950年のことだったという。[Edmund Wilson, *I Thought of Daisy* (Iowa City: University of Iowa Press, 2001)]
- 5) Margaret Drabble (ed.), *The Oxford Companion to English Literature* (Oxford: Oxford University Press, 1998)
- 6) ミレイの履修状況は、スペイン語を2コマ (スペイン語クラブの会長を務めていた)、5代学長マクラッケン (Henry Noble MacCracken, President: 1915-46) が担当する「イギリス演劇」、ヴァッサー劇場の創設者バック (Gertrude Buck) の「演劇技法」の講義を受講しており、この「演劇技法」の課題として書かれたのが『王女は小姓と結婚する』だったらしい。[Nancy Milford, *Savage Beauty: The Life of Edna St. Vincent Millay* (New York: Random House, 2001), p.137.]
- 7) 「18世紀ナポリ楽派のオペラは声楽の技巧に興味が集中し、アリアの諸形式が発展した。その中でも典型的な形式はダ・カーポ・アリアである。これは3部形式で、第3部は第1部の反復であり、第2部は第1部や第3部と対照した調性をもつ。バッハのアリアもこの形式をとっているものが多い。」「標準 音楽辞典」(音楽之友社、1966/81年)、pp.34-35.
- 8) 後述のコメディ・デラルテでは、生意気で抜け目ない召使娘コロンビーナとして登場、英国の喜劇ではハーレクインの恋人役。コンスタン・ミック著 (梁木靖弘訳) 『コメディ・デラルテ』(未来社、1987年)によれば、小間使いとして最もよく用いられた名前はフランチェスキーナで、ズメラルディーナ、パスクエッラ、あるいはこのミレイの『アリア・ダ・カーポ』のようにコロンビーナ (ナポリ) も用いられ、通例彼女は頑丈で抜け目のない百姓女で、ちゃきちゃきして悪賢く、猛烈なお喋りで、自由奔放という役柄を与えられていたというから、『アリア・ダ・カーポ』のコロンバインのような、少々頭の回

転の遅い人物という造型は伝統からは逸脱しているのかもしれない。

- 9) コメディア・デッラルテ (commdia dell'arte) は16世紀から18世紀初めに流行したイタリアの即興劇。dell'arteの正確な翻訳は困難だが、役者たちが熟練の専門職だったことから「専門の」(of the profession)の意味であるという。Phyllis Hartnoll (ed.), *The Concise Oxford Companion to the Theatre* (Oxford/New York: Oxford University Press, 1972/86), p.108. 同様の定義がジャコモ・オレリア (Giacomo Oreglia) の『コメディア・デラルテ』(*The Commedia dell'Arte*, 1961) にもあるという。[玉崎紀子・酒井正志『欧米演劇を探る——オペラ・ミュージカル・ロンドン演劇』(勁草書房, 2002年), pp.7-8.]
- 10) ミレイの詩「木曜日」には「どうしてあなたが不平を言いにくるのか/私にはわからない/水曜日にはあなたを愛したわ——そう——でもそれが/あなたに何だっているの?」という一節がある。[Nancy Milford, *The Selected Poetry of Edna St. Vincent Millay* (New York: Modern Library, 2001), p.51.] また、『ランプと鐘』3幕4場では、副筋の恋人のルイーダが「結婚は火曜日にしようか、それとも水曜日にしようか」と誘い、「だったら、水曜日に。できるだけ先延ばしにしたいから」とローラが答えている(p.100)。『王女は小姓と結婚する』の親書でも陰謀決行が土曜日とされるなど、ミレイの曜日へのこだわりも気にかかる。
- 11) 例えばウォーホールに「オレンジの自動車事故14回」という風変わりな題名の絵があることは『西洋絵画作品名辞典』(三省堂)を拾い読みすればよい。長 新太「いつもそばに本が 下」、『朝日新聞』2002年4月21日, p.19.
- 12) この単語は「編み上げブーツ」(古代ギリシア・ローマの悲劇俳優が履いた底の厚いもの)と「悲劇・悲壯調」を意味する。
- 13) 別表記「チュルシス」は、ギリシア詩人テオクリトス (Theocritus, 310?-250? B.C.) やローマ詩人ウェルギリウス (Vergil, 70-19 B.C.), あるいは後代の田園詩に登場する羊飼いや農夫の呼称。アーノルド (Matthew Arnold, 1822-88) の哀悼詩 (1867年) は、親友の詩人クラフ (Arthur Hugh Clough, 1819-61) を彼に模し、自らをCorydonとして親友の死を弔ったもの。
- 14) 別表記「コリュードン」は、古典の牧歌にきまって出る羊飼いの名前で、田舎の若者の意味。
- 15) 『グリム童話 しらゆき べにばら』(バーバラ・クーニー絵, 鈴木 晶^{しほ} 訳) (ほるぷ出版, 1995/6年) による。なお、この話はグリム童話の初版, 再版にはなくて第3版で初めて収録されたもので、初版70編を収めた『初版グリム童話集 (全4巻)』(白水社, 1997年) には当然ながら、また『明治期グリム童話翻訳集成 (全5巻)』(アイ アール ディー企画, 1999年) にもこの話は採られていない。マリア・タタル (Maria Tatar) 著 (鈴木晶ほか訳) 『グリム童話 その隠されたメッセージ』(新曜社, 1990/2年) には、この話は「赤頭巾」や「白雪姫」のように昔から口伝えに語り継がれてきた〈口承おとぎ話〉ではなく、テキストのある〈文学的おとぎ話〉の範疇に入り、カロリーヌ [ネ]・シュタールによる物語「恩知らずのこびと」を下敷きにして、ウィルヘルム・グリムが物語の結末 (王子が少女と結ばれる) を創作して『子どもと家庭の童話』用書き直したもの (p.77) であり、王子を熊に変えた犯人は「悪いこびと」である (p.272)。
- 16) 英国寓意劇で道化役として登場する、悪徳の擬人化としての悪玉, 道化 (buffoon)。
- 17) アドガー (Eadgar)=エドガー (Edgar, 944-975) は, Edmund 1世の息子でEdward殉教者王の父。957年にNorthumbria, Merciaの王になり, 959年兄Edwy [Eadwig] の死によりWessexも治めて全イングランド王となる (959-75)。国外に追放されていたDustanを呼び戻して重用, イングランド人とデーン人の融和を計り, その穏やかで友好的な政治ゆえに'Edgar the Peaceful'と呼ばれた。なお, イングランド王国創設の特定の年号を挙げるとすれば, ヴァイキング王エリック (Eric Bloodaxe, 在位947-54) が前年に死に, エドマンドの弟のEadredも逝去した955年だという。続いて即位したのはEadwig (955-59) だ

ったが、弟エドガーを擁する勢力が強まり、959年のEadwigの死後、エドガーによってイングランドは再統一され、973年に彼はパースで‘Emperor’の王冠を受けた。『アングロ・サクソン年代記』(Anglo-Saxon Chronicle)を参照。

- 18) この名前は古代アテラナ喜劇の類型的人物名でもある。
- 19) 「ロンドンのベネシュのチェコ亡命政府の指令によりイギリスで特殊訓練を受けていた元チェコ軍下士官の落下傘兵、27歳のメーレンの農民の息子ヤン・クビスとスロヴァキアの機械工ヨーゼフ・ガブチクは、1941年12月末に出動し、暗号名「アントロポイド」をもって、チェコの故郷に非合法に生活していたが、1942年5月27日10時30分頃、かねて決めていたプラハのホレショヴィツツ区の道路がU字形に急カーブを描く場所で、車がスピードを落としてからふたたびスピードを上げるときに、ハイドリヒを襲撃した。ガブチクの銃撃は不発に終わり、ハイドリヒと運転手が反撃のため車を止めたとき、クビスの投げたイギリス製特殊手榴弾でハイドリヒは重傷を負い、まもなく6月4日に死亡した。38歳であった。／保護領全土に戒厳令が布かれた。ハイドリヒが死亡するまでにすでに157人の人質が射殺された。6月9日にベルリンでハイドリヒの国葬が行われ、ベルリン・フィルハーモニーはロベルト・ヘーガー指揮でワーグナーの『神々の黄昏』から葬送行進曲を演奏した。総統会議でクラドノ県の小さな鉱山労働者集落リディツェ村が報復の対象とされることとなり、1942年6月12日にプラハの保安警察および保安情報部指令官にその決定が伝えられた。一、成年男子全員射殺、二、全女性を強制収容所へ連行、三、子供を集合させ、ドイツ化可能な者はライヒの親衛隊家族に渡し、残りは別の訓育に委ねられる。四、集落は焼き払われ、土地は均される、と。女性と子供が移送されたのち、成年男子199人が射殺された。184人の女性は女性強制収容所ラーフェンズブリュックへ移送され、7人の女性はテレージエンシュタットの警察監獄へ、4人の妊婦はプラハの病院へ引き渡された。戦後移送された女性のうち143人が帰還した。集落の子供98人のうち90人はワルテランドのグナイゼナウ収容所へ収容され、8人はドイツ化されうるとしてドイツ人家族の養子にされた。戦後ふたたび発見された子供は16人にすぎなかった。／6月18日朝、襲撃者たちの他に5人の落下傘兵を教会堂の祭壇聖歌隊席や地下聖堂にかくまったプラハのレッセル街のチェコ正教会の聖カール・ボロモイス教会は、親衛隊将校19人と下士官740人に包囲され、2時間の戦闘後に、3人の落下傘兵は捕らえられて、死亡した。教会の司祭は残る4人を引き渡すことを拒否し、刺激性ガスが地下室へ吹き込まれ、プラハの消防隊は地下室にモルダウ川の水を注ぎ込んだ。落下傘兵、教会の司祭、助手たちが殺戮され、教会前の舗道に並べられた死体のうちにガブチクとクビス、プラハのチェコ正教会の長老ヤン・ソンネヴェンドと主教ゴラツの死体もあった。／リディツェ村ののちに、6月24日に小集落ラザッキイも絶滅された。いずれの集落も犯行者サークルを支援していたという、たんなる憶測による報復であった。」——大野英二『ナチ親衛隊知識人の肖像』(未来社、2001年)、pp.70-72。さらに、ゲリー・S・グレーバー(滝川義人訳)『ナチス親衛隊』[原著名Gerry S. Graber, *History of the SS*, 1978] (東洋書林、2000年)から補足すれば、オープンカーに乗ってどうぞ襲ってください、といわんばかりの命知らずの男ぶりをハイドリヒは好み、彼にとって「人生はフェンシングの試合であり、自分はその達人という認識」があったこと、通常午前9時30分に通過するはずがその日に限って1時間遅れていたこと、ガブチクのステンガンが不発だったのは「安全装置を解除していなかった」ためであることが記されている(pp.184-186)。この同じグレーバーの著書が典拠と思われるが、ネットから得た類似記事も以下に引用しておこう。——<1942年5月27日午前10時25分プラハ市内のKirchmeyerstrasse (現Zenklova)からKlein Holeschoweizerstrasse (現Holesovickach)へのヘアピンカーブで事件は起きた。ロンドンのチェコ亡命政府の命を受けたJoseph GabcikとJan Kubisの両下士官とチェコ国内レジスタンス組織からの援軍二名の計四人が予てからの計画通り、その朝、Reinhard Heydrichの乗る濃緑色のメルセデスベンツ・コンパティブルを襲撃した。Kubisの投げた手榴弾で車は破壊されたが、Heydrichは車を

飛び降りるとピストルを連射しながらKubisらを追った…が、Heydrichは突然立ち止まり、尻の右側に手をやったかと思うと、そのまま道路に崩れ落ちた。Heydrichの腹部および肋骨付近にはスプリングや金具等の破片が喰い込み、脾臓内からは座席の詰め物として使われていた馬の毛が検出された。病状は九日間一進一退を繰り返したが、1942年6月4日Heydrichは死亡(享年38歳)した。国葬はベルリンにおいて盛大に執り行われ、Hitlerはその弔辞の中でHeydrichを『ein Mann von Stahl und Eisen (鋼鉄の男)』と称した。…1万人ほどが逮捕され、犠牲者は1300人を下らない><http://www5c.biglobe.ne.jp/PEIPER/page011.html> また別のサイトではく民家100軒が消失、82人の子どもがガス室で殺害された。1969年女性彫刻家マリエ＝ウヒチロヴファーがこどもたちの記念ブロンズ像制作に着手、89年の死後夫のイジー＝ハンプルが引継ぎ、世界からの基金や無報酬の奉仕などによって2000年6月、全82体の像が完成した。> <http://monochromeurope.hoops.ne.jp/gallery/czech/lidice/lidicej.htm>

- 20) 『ドレッサー』(*The Dresser*, 1980) のハーウッド (Ronald Harwood, 1934-) 脚本の映画『黎明作戦』(*Operation Daybreak*, 1975) [公開時タイトルは『暁の七人』]には、この暗殺計画と実行、その後の暗殺者の最期が事実に基づいて丹念に描かれている。チェコの雪原に降り立った落下傘隊員3名は、抵抗運動のグループとの接触に成功し、共同して暗殺計画を練る。ハイドリッヒの乗るベルリン行き列車を線路沿いの建物から狙撃する1度目の計画は、運悪く対向列車の接近で失敗したものの、早朝定刻に通過する車を襲撃する計画は実施される。肝心の銃は不発に終わったが、手榴弾によって致命傷を負わせ、数日後に当初の暗殺目的を達成した。これに対してナチスはリディツェの殲滅に動くわけだが、やりきれないことには、落下傘部隊の同僚の1名が妻子を守るために仲間二人の名前と隠れ場所の教会をナチスに密告し、教会はSSに包囲される。激しい銃撃戦の抵抗を経て、籠城した教会地下室に煙や水攻めを受けた二人は最後には互いに拳銃で自害した。
- 21) リディツェの名前を蘇らせるために、1か月後の7月12日にはイリノイ州のある町がリディツェと改称、ペルーのリマ、ベネズエラのカラカスでも1地区がリディツェと改名したという。[いぬい とみこ『野の花は生きるーリディツェと広島の花たち』(童心社, 1972/82), p.26.]
- 22) <http://monochromeurope.hoops.ne.jp/gallery/czech/lidice/lidicej.htm>
- 23) Peter Quartermain (ed.), *Dictionary of Literary Biography Volume 45: American Poets, 1880-1945 First Series* (Detroit/London: Gale Research Inc., 1985), p.275.
- 24) Allan Ross Macdougall (ed.), *Letters of Edna St. Vincent Millay* (New York: Harper & Brothers, 1952), pp.320-321.

テキスト

- Edna St. Vincent Millay, *The Princess Marries the Page* (New York & London: Harper & Brothers, 1932)
 _____, *Three Plays* (New York & London: Harper & Brothers, 1926)
 _____, *The King's Henchman* (New York & London: Harper & Brothers, 1927)
 _____, *Conversation at Midnight* (New York & London: Harper & Brothers, 1937)
 _____, *The Murder of Lidice* (New York & London: Harper & Brothers, 1942)

参考文献

- Norman A. Brittin, *Edna St. Vincent Millay* (New York: Twayne, 1982)
 William B. Thesing (ed.), *Critical Essays on Edna St. Vincent Millay* (New York: G.K.Hall & Co, 1993)

河野賢司

加藤菊雄「ジャズ時代の詩—エドナ・セント・ビンセント・ミレー研究」,『帝京女子短期大学紀要』第6号, 1986年, pp.1-18.

——「失われた世代の詩—エドナ・セント・ビンセント・ミレー研究」,『帝京女子短期大学紀要』第7号, 1987年, pp.1-28.

Discography

Bohuslav Martinu, *Field Mass/Symphony No.4 etc.* (Colchester, Essex: Chandos Records, 1993) CHAN 9138.

ビデオ

Edna St. Vincent Millay: A Journey through Life (Nebraska ETV/Great Amwell Production, 2000), ca. 30 min. 多くの詩の朗読引用を中心にミレイの生涯を辿る内容。

Millay at Steepletop/The Last Tram (Milestone Film & Video, 2001), 25min/12min.

農場の納屋で発見された貴重な16ミリに残されたミレイと家族の生活ぶりや、詩の朗読、妹ノーマ・ミレイとのインタビューをまとめた1968年の作品。廃止前のグラスゴウ市内電車の1962年作のドキュメンタリーは同じ監督によるものだが、ミレイとの関係はない。